目次

第1章 遊牧研究への道……1
遊牧とは／遊牧という言葉／遊牧と牧畜／遊牧の研究史／アムダリア騎馬行——本書執筆の背景(1)／トルコ系遊牧民ユルックの調査——本書執筆の背景(2)／遊牧研究の深化とひろがり——本書執筆の背景(3)

第2章 現生人類史のなかで……31
狩猟採集の時代／現生人類の誕生／アフリカからの移動／ユーラシアへの拡散／現生人類の時代へ／言語運用能力の獲得／美的観念の共有

第3章 遊牧の骨格……59
放牧の風景／夜間放牧の背景／放牧時のかけ声(コーリング)／家畜群の認識体系——ヤギの名称体系／ヒツジ・ウシ・ラクダ・ウマの名称体

系／ヤギの識別体系――耳の形と体毛の色／ヤギの形状の記述／個体名の種類／母系制の系譜／認識体系の共有範囲／ヒツジ・ウマ・ラクダ・ウシの識別体系／ウシの識別体系／搾乳をめぐる技術／乳製品への加工／去勢と性のコントロール／移動の情景

第4章 遊牧の起源 …… 123

放牧の原風景／野生動物群との共生／野生ヤギ・野生ヒツジ群との共生／遊牧の形成／搾乳の開始と遊牧の起源／野生ウシ群との共生／野生ウマ群との共生／野生ラクダ群との共生／去勢の出現／家畜化と共生関係／家畜化におけるイヌの位置／小規模集団の役割／農耕の起源とその影響／ギョベクリ・テペ遺跡の解釈／五畜の形成／遊牧の第一地域・第二地域／テントの導入

第5章 遊牧の展開 …… 185

遊牧の核心／遊牧の資源活用／騎馬の由来／車行の歴史／荷物の運搬と交易活動／社会編成の柔軟性／都市の形成／歴史変動の原動力／西アジアにおける統治機構／文字記録のなかの遊牧民／『歴史』にしる

されたスキタイ／匈奴の登場／鮮卑拓跋部の持続性／突厥とオスマン帝国／モンゴル帝国の出現／近代国家制度の形成／遊牧の未来
あとがき……251
索引

第１章

遊牧研究への道

ヒツジの群れ(少数のヤギを含む)の移動．中国新疆アルタイ山脈にて．1993 年 7 月．
松原正毅撮影，国立民族学博物館蔵

遊牧とは

遊牧は、農耕とならぶ現生人類の古い生活様式のひとつである。遊牧は、群れをなす習性をもつ有蹄類と共生しながら、そこから産出する乳や毛、皮、肉などの利用を基盤に移動性に富んだ暮らしをいとなむ生活様式である。現生人類が深いかかわりをもった有蹄類には、偶蹄目(ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダ、トナカイなど)と奇蹄目(ウマ、ロバなど)がある。歴史をかさねるとともに、野生動物の群れとの相互的な共生関係は、現生人類による動物群への管理の度合いの強いものにすこしずつ変化してゆく。その変化は急激ではなく、ながい時間をかけたゆるやかなものであっただろう。

ここでしめした遊牧の定義のなかで、重要な要素は三つの点にしぼられる。それは、群居性の有蹄類との共生、乳や毛、皮、肉などの利用、移動性に富んだ暮らしの三点である。これらの三つの要素が有機的に融合するなかで、はじめて遊牧の起源をみることができるようになる。遊牧という生活様式は、本来的に移動する動物群との共生のうえに全生活体系を構築したものといえるだろう。

遊牧の起源を含めた遊牧研究の困難さは、その生活そのものに起因しているところがおおいといえるだろう。移動を基盤としている遊牧生活においては、考古学的な検証の対象となりうる長期的な居住の痕跡や堆積をほとんどのこすことがない。現在の遊牧生活において数日から数カ月のあいだ使用した露営地でも、移動のあとには居住の痕跡をみごとなほどのこしていない。遊牧生活では、考古学

的な遺跡だけでなく、考古学的な遺物をのこすことも稀である。遊牧を考古学的な手法で研究するにあたっては、多大な制約が存在するといってよいだろう。

遊牧研究を困難にしているもうひとつの要因は、遊牧民自身がみずからの歴史を文字記録としてしるす事例がほとんどなかったことである。紀元前の遊牧民として有名なスキタイや匈奴の活動の様子は、ヘロドトスの『歴史』や司馬遷の『史記』、班固の『漢書』などに記録としてのこされた。これらは、いずれも遊牧生活の外部者による記録である。紀元後も、八世紀前半のオルホン突厥碑文など少数の例外的事例をのぞけば、遊牧民自身がみずからの歴史を記録としてのこすことはおこなわれていない。

遊牧生活の外部者の視点からえがかれた歴史には、当然ながら記録者の偏見がくわわる部分がおおくなる。この偏見をしるした典型的な文章が、『漢書』匈奴伝にみられる。(1)

> 夷狄の人は貪慾で利を好み、頭髪を被り、左衽（さじん）の服を用い、人間の顔をしながら獣の心をもつ。中国とは章服を異にし、習俗もちがっている。飲食も同じでなく、言語も通じない。北のはての、寒い荒野に離れ住み、草を逐い家畜にしたがって移動し、射猟で生活を立て、山谷を以って隔（へだて）とし、砂漠をもって身をかくす守りとしている。天地が外と内とに隔絶せられているわけである。
>
> かかるが故に聖王は、〔彼等異民族を〕禽獣と見なしてこれを畜（やしな）うけれども、彼らと誓約を結ぶことはせず、こちらから出かけて攻伐はしない。彼等と約束を結ぶと、贈与に費用がかかって、しかも欺かれる。彼等を攻めるときは、軍隊を労（つか）らせて、しかも侵入を招くこととなる。彼等の

土地は、〔占領しても〕耕作して食料を生産することはできず、彼等の人民は、〔征服しても〕臣下として畜うことはできない。それゆえ〔彼等を〕外にして、内にしないのである。疎んじて近づけず、政治教化を彼らには及ぼすことなく、その国に暦制を授けることもしないのである。

〔かれらが中国に〕来服したときは、戒諭してこれを統御し、離れ去ったときは、〔中国は〕警備を厳重にして防備する。彼らが〔中国の〕道義を慕って貢献して来れば、彼等に接するには礼譲を以てし、牛馬に手綱鼻づなをつける如くに牽制し続け、〔こちらから悪をしかけず〕曲悪は彼等側にあるようにする。これこそ聖王が蛮夷を制御する常道である。

古代中国においては、遊牧民の匈奴を「人面獣心」の存在としてあつかい、できるだけ直接的な接触を回避するようにしていたのである。こうした姿勢は、『漢書』以降の中国の史書の記述にも定型的にうけつがれてゆく。

遊牧民を別枠の存在としてとりあつかう姿勢は、近代国家制度のなかでも継承されている。遊牧民を内部にかかえるおおくの近代国家において、強圧的な定住化政策や遊牧絶滅政策がおこなわれた。こうした典型的な事例は、旧ソ連においてみられる。旧ソ連における遊牧絶滅政策は、徹底的なものであった。一九三〇年代前半におしすすめられた遊牧絶滅政策によって、カザフスタンを中心に数百万人におよぶ死者がでたといわれている。

遊牧民を特別視したり、別枠の存在としてあつかう背景には、移動という要素が強くはたらいているとおもわれる。定住という視点からみるとき、移動にもとづいた生活は正常なものとされない偏見

が存在しているわけだ。現生人類史のなかでは、むしろ定住という生活様式のほうが、あたらしく出現したものといえる。定住の生活様式が現生人類のなかにひろくみられるようになるのは、約一万年前からのことであるからだ。

約二〇万年とされる現生人類史のなかで、定住よりも移動のほうが常態的であったといえる。定住生活をおくった期間は、移動ですごした期間よりもはるかにみじかいわけである。遊牧は、あきらかに移動生活の延長線上に出現している。現生人類の移動生活が野生の動物群の遊動生活にかさなりあったところから、遊牧が出現する。その意味では、遊牧を特別視するのはかならずしも正当なこととはいえないだろう。遊牧を、本来あるべき位置において再評価する必要がある。それと同時に、現在の遊牧生活そのものを凝視すべきである。そこから、はじめて遊牧の起源をたどる道がひらけてくるだろう。

遊牧という言葉

現在日本語のなかでもちいられている遊牧という言葉は、漢語に由来したものである。日本語のなかでいつから遊牧という言葉がつかわれはじめたのか判然としないところがあるが、幕末・明治期以前にまでさかのぼるものではないようだ。日本語のなかで遊牧という言葉が使用された早期の事例としては、西周訳『万国公法』(京都竹苞楼、一八六八年)があげられるだろう。この書のなかで、「其民或いは漁猟或いは遊牧を以て生となし」という文章がみられる。ここにあげた『万国公法』は、西周が

オランダに留学していたときに師事したフィッセリングの口述を筆記・翻訳したものだ。

漢語のなかの遊牧という言葉も、ふるくからみられるものではない。『史記』や『漢書』をはじめとする歴代のおおくの史書のなかで、遊牧という言葉の使用例がほとんどないからだ。『後漢書』烏恒伝では、「水草に随(したが)いて放牧し、居に常処無し」という文章がみられる。ここから、放牧の用例が遊牧よりもはやくみられたことがわかる。『後漢書』は、四三二年に成立したとされる。

比較的にはやい事例として、一〇六〇年に成立した『新唐書』西域伝下大食の項に游牧の用例がみられる。それは、「故に大食常に此に游牧す」という文章である。大食は、唐代にアラビア人をさす言葉としてもちいられた。遊牧の用例が増加するのは、一八世紀ころの清朝の資料からである。清朝の行政法規を集成した『清会典事例』などに、游牧の用例がよくみられるようになる。游牧は、遊牧と同意味である。時代をへるごとに、遊牧という言葉が多用されるようになった。

清朝の資料にあらわれる遊牧(游牧)は、ツングース語系の満州語における該当語の漢語への翻訳語であったとされている。満州語における該当語は、ヌクテンビ(nuk'tembi)である。ヌクテンビは、満州語で移動や遊牧を意味している。漢語に該当する言葉がなかったので、満州語ヌクテンビにあたる訳語をつくりだしたといわれている。あるいは、先行例を参照した可能性もかんがえられるであろう。満州語は、当時の清朝の支配者層の使用する言語であった。

トルコ語では、遊牧を意味する言葉はギョチェベリック(göçebelik)である。遊牧民のことは、ギョチェベ(göçebe)という。このギョチェベリックやギョチェベは、動詞ギョチメック(göçmek)の派生語である。動詞ギョチメックは、移動することを本来の意味としている。トルコ語においても、満州語

と同様に移動と遊牧はかさなりあった語彙として使用されているわけである。これは、遊牧の基盤が移動であることを表象しているところからきているものといえるだろう。この場合の移動は、全生活体系とともに家畜群を共伴していることが前提とされている。

英語では、遊牧にあたる言葉としてノマディズム(nomadism)がもちいられる。このノマディズムには、遊牧生活とともに漂白生活や放浪生活の意味がこめられている。ノマディズムのもとになったノマッド(nomad)は、ギリシア語のノマス(nomas)に由来している。ノマスのもとの意味は、放牧場をもとめて歩きまわることである。このノマスには、本来的に家畜群をふくめた全生活体系の移動という意味あいは薄いようだ。学術的な用語としては、遊牧としてパストラル・ノマディズム(pastoral nomadism)がつかわれることがおおい。パストラルの名詞形パストラリズム(pastoralism)は、牧畜の意味である。

満州語のヌクテンビ、トルコ語のギョチェベリックと英語のノマディズムを比較するとき、当然ながらそれぞれの言語が背負っている歴史が背景としてうかびあがってくる。日本語において比較的あたらしい時代に遊牧という漢語をそのままうけいれたのは、日本列島にはもともとそうした言葉を生みだす生活基盤がなかったためといえるだろう。

遊牧と牧畜

ここで、遊牧に関連する用語類を整理しなおしておく必要があるだろう。これらの用語類が、遊牧

の起源をかんがえるうえでの歴史的意識と微妙にからまりあっているからである。それは、現生人類と野生動物との相互的な関係や動物の家畜化をどうとらえるかという基本的な問題に直結してゆく。

日本語のなかで、遊牧とよく混用される言葉として牧畜がある。牧畜という言葉も、遊牧と同様に漢語に由来している。牧畜の用例は、『後漢書』樊宏伝にみられる。ここでは、「池魚牧畜、求め有れば必ず給す」という文例になっている。この文例のなかでは、池の魚と飼養された家畜が対として表現されているのである。牧畜の本来的な意味は、あくまでも「飼養された家畜、畜類を飼養すること」といえる。日本語のなかの牧畜の用例は、明治初期からさかんになるようだ。たとえば、村田文夫『西洋聞見録』(井筒屋勝次郎、一八六九～七一年)に「阿爾蘭(アイルランド)は気候温和にして甚だ牧畜に適し」のような文例がみられる。

牧畜という言葉の前提には、動物の家畜化、家畜化された動物という観念の存在していることが明白にうかびあがってくる。牧畜という概念自体が、動物の家畜化がなければ成立しないものといえるだろう。当然ながら、牧畜という言葉にはテントや家族などをふくむ全生活体系をともなった移動を連想するニュアンスはみられない。牧畜に関連した牧場・牧夫・牧童・牧牛・牧馬・牧羊などの用語は、いずれも家畜化と深くむすびついたものといえる。

ときに、遊牧的牧畜や定住的牧畜の表現をみることがある。移動性の有無を基準にして、牧畜の形態を分類したものといえる。本書で採用している遊牧の定義(群居性の有蹄類との共生、乳や毛、皮、肉などの利用、移動性に富んだ暮らしの三つの要素の有機的な融合)にてらしあわせてみるとき、遊牧的牧畜の表現はすこし妥当性を欠くところがあるようだ。遊牧と牧畜とのあいだに、本来的には意味的な距

離があるからである。

遊牧と牧畜とのあいだの意味的な距離は、家畜化を境界線に生じるものとかんがえられる。遊牧の定義のひとつの要素である「群居性の有蹄類との共生」は、野生の状態の動物群にも適用されるからである。もちろん、一定の条件がみたされていれば、この定義は家畜化された状態の動物群への適用も可能といえる。一定の条件とは、共生関係の保持がある程度の持続性をもつかどうかにかかわるところである。

遊牧に対して、牧畜においては群居性の有蹄類との共生は必要条件とはならない。牧畜は、動物の家畜化が成立したあとに出現する形態といえるからだ。遊牧とちがって、牧畜は動物の家畜化がなければなりたたないものである。時間的な経過のなかで、遊牧と牧畜とのあいだには多様な変異形があらわれたであろう。そのなかのひとつの変異形として、遊牧的牧畜を想定することは可能といえるかもしれない。現生人類の主要な生活様式のひとつである農耕が登場してくるとともに、遊牧と牧畜とのあいだの変異形の多様化がさらに進行したとおもわれる。

歴史的な時系列からいえば、あきらかに遊牧は牧畜に先行している。牧畜は、遊牧への農耕や家畜化の影響のなかで成立したとかんがえられる。一部では、遊牧の農耕起源説や遊牧の牧畜起源説がとなえられている。歴史的な時系列からいえば、これらはすべて逆といえる。遊牧が、すべてに先行している可能性が強いであろう。

遊牧に関連して、牧畜のほかに移牧という言葉がもちいられることがある。移牧は、冬は低地で夏は高地で家畜群を飼育する牧畜の一形態である。ヨーロッパのアルプス山地などで、移牧の典型的な